

ラブラリー・オブ・ザ・イヤー授賞施設等一覧

施設等	授賞理由
2021年	
ライブラリアンシップ賞	
滝川市立図書館	<p><u>図書館が町を支え、町が図書館を支える、理想的な互恵関係を実現</u></p> <p>町の中心部の市庁舎2階へと10年前に集約されて以降、「行動する図書館」を標榜し、地域の学校、保育園・幼稚園、専門学校、商店、企業、NPO団体、出版社、書店、医療機関など、町の隅々にまで連携の手を広げてきた。年間展示の半分以上がコラボ企画であり、中心エリアへの集客効果も果たし、人口4万人の町で、図書館の年間利用者数は15万人となっている。地域の雑誌スポンサーや「図書館ささえ隊」による個人寄付も多く、図書館と町が互いを支えあう関係を実現している。また、庁舎内にあることで、行政情報の告知やパブリックコメントの集約など、市役所との一体的な運営も特筆される。長年の精力的な努力の積み重ねを評価する。</p>
マンガ『夜明けの図書館』および関係者	<p><u>10年間にわたって図書館の世界を描き続けた作品と制作活動</u></p> <p>当該作品は2010年から雑誌掲載で全28話が発表され、2021年にコミック7巻で刊行が完結した。新人司書のレファレンスサービスを通し、現代の図書館のさまざまな取り組みや課題が紹介されている。図書館の活動とともに「人と人」「本と人」の関係が巧みに描かれ、文学作品としても高い評価を得ている。制作にあたり、著者や編集者の丁寧な調査とヒアリングが継続して行われており、現場の図書館員の協力が作品に対するリアリティや高いクオリティをもたらしている。10年間の長きにわたって一般読者に図書館の魅力を示し、図書館員や図書館員になろうとする人々に示唆と勇気を与え続けたことを高く評価する。</p>
優秀賞	
あかし市民図書館	<p><u>官民協働での子育て支援拠点としての図書館政策</u></p> <p>駅前再開発・中心市街地活性化に際して、図書館が子育て支援拠点としても重要な意義と役割をもつと位置づけた政策を展開している。事業推進においては他自治体から優秀な人材を招聘しつつ、民間事業者との連携を図り、文字通りの官民協働を成し遂げている。その結果、「子育てしやすいまち」という明石市の評価に大きく貢献している。なお、こうした結果の根本には図書館としての地力の確かさがあることも強調しておきたい。</p>
指宿市立図書館および特定非営利活動法人本と人をつなぐ「そらまめの会」	<p><u>市民が自然に支え、市民とともに明るく歩み学び続ける図書館</u></p> <p>認定司書を輩出する研修体制の確立や、市民の探究心に市民とともに調べて答えるレファレンス等、図書館として根源的な力を培い発揮している。クラウドファンディングによるブックカフェの実現など、旧来の枠にとらわれず、市民や行政、メディアと協働しながら、市民のためにすべきことを10年以上の時間をかけて着実に実現している。これらの取り組みは、市民NPOによる指定管理の持続モデルを示しており、その点を評価する。</p>
福井県立図書館・文書館・ふるさと文学館	<p><u>次の時代を見通した、3館協働による利用者目線の図書館活動</u></p> <p>次世代の福井を担う若年層への多彩な企画やホームページの充実、一般社会に反響をもたらした「覚え違いタイトル集」など、利用者目線の図書館運営を評価する。なかでも文書館主導の「デジタルアーカイブ福井」は複数の大学で活用紹介されている実績があり、NDL連携や学校向けアーカイブズガイドの提供等、進化を続けている。成長の土台には3館の緊密な協働と、館員自らも利用者の立場で運営する市民感覚がある点を強調したい。</p>

施設等	授賞理由
三重県立津高等学校図書館	<p><u>時代に即応し、読書と学びの機会を保障する学校図書館運営</u></p> <p>一人一人の生徒の求めに応じて、本やさまざまな情報や人々とのつながりを教職員が丸となって提供し、社会参加や活躍の場を学校図書館が創出することで、学びの発展を促している。また、COVID-19 対応では全国に先駆けて実施した休校中の自宅に本を届ける「津高生に本を届けようプロジェクト」をはじめ、公民問わず多彩な人脈を駆使して、一切の妥協なく、生徒に本物の機会を提供し続けている関係者一同を高く評価する。</p>
特別賞	
八戸ブックセンター	<p><u>本を読み・書き・話すことで本好きを増やす本のある暮らしの拠点</u></p> <p>本のある暮らしの拠点となることを八戸市民とともに目指し、「本のまち八戸」を活動理念に掲げている。八戸市内に本を読む人や書く人を増やすために、公共図書館・民間書店・学校などと相互補完的・互恵的な関係を構築することで、本の提供と本を享受するための社会的基盤として整備している。昨今の地方都市では、その数を徐々に減らしている「本のある環境」の一つとしての書店を、公立運営という形態によって継続性を持たせていることは特筆に値する。本を読むための環境整備だけでなく、本について語り合うことや本の執筆サポートなど、これからの時代にふさわしい公共サービスのあり方を構想し、市民に提供している点は高く評価できる。</p>
2020年	
優秀賞	
安城市中心市街地拠点施設アンフォーレ及び中核施設安城市図書情報館	<p>当該館は2017年に図書館を中核とした複合施設として開館した。旧館も評価の高いサービスを展開していたが、新館では過去の蓄積を踏まえ、さらに洗練・高度化したサービスを展開している。例えばNDC 排列に加え司書らが考え抜いた独自分類を併用し、わかりやすい書架構成を提供している。職員はICT 機器を活用した貸出業務等の省力化及びインカムによる情報集約を行い、レファレンスサービス等の迅速化・高度化に努めている。また、学校図書館との連携による児童サービスの充実のほか、Fab 機能・ビジネス支援機能・子育て支援機能・健康支援サービス機能の実装も特徴である。1Fフロア及び広場は近隣商店やハンドメイド作家等へ販売拠点として提供し、住民交流による触発を図っている。海外図書館を複数回視察するなど、図書館に対して深い知見と期待を持つ現市長のリーダーシップのもと、関係者が丸となって開館準備に臨み、直営で運営に取り組んでいる。伝統的な図書館機能を安定して提供しつつ、高度化する知の拠点としての機能をもブーストさせたといえよう。</p>
生駒市図書館	<p>生駒市では市民協働による「ビブリオバトル」の全国大会を開催し、本によるコミュニケーションを活発化するとともに、図書館ワークショップから生まれた夜の図書館イベントを市民主導で開催、「茶せんのまちいこま」ならではの茶道とアクティブラーニングをつなげた取り組みや、図書館を活かした女性の創業支援、認知症にやさしい図書館プロジェクトなど、さまざまなプログラムに挑戦している。さらに、学校給食センターとの連携で、本の中に出てくる料理を給食の献立として子どもたちに提供する図書給食プログラムをコーディネートするなど、ユニークな活動を展開している。市長の小紫雅史氏は、「生駒市のまちづくりのために欠かせないピースが直営の図書館にはある」として、図書館をまちづくりの拠点と位置付けている。生駒市役所全体が、脱公務員化を図るさまざまな活動を展開しており、その中で図書館が中心的な役割を果たしている点を高く評価した。</p>
みんなで翻刻	<p>「多数の人々が協力して史料の翻刻に参加することで、歴史資料の解読を一挙に推し進めようというプロジェクト」という説明に言い尽くされているのが、この取り組みである。だが、本賞の観点から言えば、1) 既存の史資料の活用、2) 最新技術の導入、3) 参加者のリテラシー向上、4) 資料デジタル化の推進、5) 新しい知識・情報の創造という図書館・ライブラリーが果たす役割を実現している点を高く評価する。一連の取り組みにおいて、史資料を保有する複数のMLAK 機関との連携がすでに並行して進められていることも素晴らしく、MLAK 機関にとっての本サービスの重要性を示している。多くの図書館等が古文書を読める世代を失いつつあり、その結果として史資料を死蔵しかねない状況にあって、「みんなで翻刻」の存在意義は計り知れない。文化機関の伝統的な役割を技術がアップデートしていく取り組みとして、ますます発展させていく必要がある取り組みである。</p>

施設等	授賞理由
須賀川市民交流センターtette	東日本大震災からの創造的復興を目指し、施設のコンセプトに「人を結び、まちをつなぎ、情報を発信する場の創造」を掲げ、図書館を核として、生涯学習機能や子育て支援機能、市民活動支援機能、賑わい機能などを併せ持つ集客力の高い融合施設として整備している点を高く評価した。また、複合施設でありながら、各機能が緩やかにつながる開かれた空間を創出し、図書館エリア以外の交流スペースなどの各機能エリアにも図書を配架する全館配架や、市民の活動に合わせたテーマ配架などに挑戦するとともに、多機能施設のメリットを生かした機能連携を図った事業を展開するなど、市民交流の拠点として、滞在型・交流型図書館づくりを推進している。さらに、設計段階から35回の市民ワークショップを行い、中学生から高齢者まで延べ700人以上の市民が参加し、それらの意見を取り入れているとともに、オープン後も設計者やコンサルタントが関わるアドバイザー制度を設け、民間の意見を取り入れる仕組みを構築している点も併せて評価した。
ライブラリアンシップ賞	
北海道ブックシェアリング	北海道は、その地理的条件や厳しい経済・財政状況から、図書館設置率、学校図書館の予算措置率、無書店自治体数などがいずれも全国ワーストレベルにあるが、北海道ブックシェアリングは、その読書環境を少しでも改善するべく活動してきた一般社団法人である。2018年の胆振東部地震では、被災地にいち早く入り、図書館復興の先頭に立ったこと、書店のない地域に行きつてブックフェスティバルを開催し、過疎の町の知的ニーズに応えてきたこと、また今年春には学校図書館サポートセンターを開設し、自治体の学校図書館づくりの本格的支援に乗り出したことなど、数々の地域の課題に向き合い、真摯に地道で戦略的な努力を重ねてきたことを評価した。
saveMLAK	2012年の優秀賞に続く2度目の授賞となるが、ライブラリアンシップ賞にふさわしい活動を10年近くにわたって継続してきている点を評価する。特に今回は、1) COVID-19を受けての公共図書館、大学図書館、専門図書館等の休館状況の悉皆調査を継続的に実施している点、2) 2011年の東日本大震災を受けての発足時に比べて担い手がより一層拡張している点、3) 呼びかけ「災害への『しなやかな強さ』を持つMLAK機関をつくる」を発出する等、アドボカシーに注力している点を評価する。これらの活動はsaveMLAKだけの活動に留まらず、大手紙の社説でsaveMLAKの調査や呼びかけに基づく論説が展開される等、図書館等の文化機関のアドボカシーに大きく貢献している。なお、この10年にわたって、補助金や助成金に依存することなく、寄付と物販によって自主財源を確保して自立性の高い活動を継続している点も特筆しておきたい。
特別賞	
新潟市学校図書館支援センター	新潟市教育委員会では「新潟市教育ビジョン」及び「新潟市子ども読書活動推進計画」に基づき、教育委員会内の各課が連携して学校図書館の利活用を推進している。なかでも新潟市学校図書館支援センターは、市立図書館からの団体貸出に加え、学校司書向けの研修、各学校図書館への訪問、実務マニュアルの作成、各種情報の提供など、多様なメニューでサポートしている。本来どの自治体でもすべきさまざまな施策を、長年にわたり、徹底して実施している点を高く評価した。
2019年	
優秀賞	
札幌市図書・情報館	<p><u>札幌市図書館政策のこれまでとこれから ～図書・情報館の誕生～</u></p> <p>札幌市では近年、電子図書館、大通カウンターでの図書の貸出・返却、えほん図書館の開設と政令指定都市の中でもトップクラスの図書館サービスを提供している。中でも、昨年開館した札幌市図書・情報館は、わずか1500㎡という面積に新たな利用者層も取り込み、開館1年足らずで100万人の来館者を獲得した。「はたらくをらくにする」という明確なコンセプトを生かすため、本の貸出を行わず、レファレンスサービスを重点的に行い、日本十進分類法を配架に使わないなど、すべてが職員の工夫によって行われている。このことは計画的に職員を育成したことによって成り立ったと思われる。本来の図書館ネットワークが完成しているまちにおいて、何らかの図書館機能を特化させるというサービスの進化形を具現化したものであり、札幌市の優れた図書館構想が、この図書・情報館や市民への図書館サービスを誕生させたことを評価した。</p>

施設等	授賞理由
<p>恩納村文化情報センター</p>	<p><u>村民サービスと観光サービスをバランスよく満たす村立図書館の新モデル</u></p> <p>図書館未設置自治体に2015年に開館して以降、図書情報フロアと観光情報フロア、さらには連結する博物館、隣接する道の駅的施設と連動して非常に広範囲かつ本質的なサービスを展開している。団体貸出を利用した村内リゾートホテルへのミニライブラリーの設置や観光客への利用者カード発行、利用に基づく近隣施設での割引実施等が注目されるが、同時に村立の図書館として地域資料の旺盛な収集と活用、サンゴのかかるたや絵本の制作への貢献等、地域の知識・情報の創造に具体的な役割を果たしているそのバランスを評価したい。</p>
<p>県立長野図書館</p>	<p><u>知の公共性をひたむきに志向した、共創の舞台となる情報拠点の構築</u></p> <p>これからの「公共」とは何か、という非常に困難な問いに対し、正面から向き合っている図書館である。この図書館では従来の児童書の貸出に留まらない「体験の貸出」や、学生・社会人向けのコモンスの設置、知の公共圏を現出させるアンカンファレンスのスタジオたる信州・学び創造ラボなどを実装しており、他の図書館と参考となりうるモデルルーム機能をも持つことが特筆できる。これら空間・機能・サービスは単にトップダウンで作られたのではなく、館長のアイデアに触発されつつ、構成図書館員・住民・大学生・図書にかかわる様々な団体が討議しながら作り上げていった点を評価した。</p>
<p>京都府立久美浜高等学校図書館</p>	<p><u>高校生と実社会との繋がりを深める学校図書館改革</u></p> <p>同校では、地域社会と繋がり、地域資源を活用しながら行う地域探究を教育の柱とした新学科を2020年度に新設する。新教育の方針に即した学校図書館改革は2016年より本格化し、図書館の一般公開を機に、外部協力のもと様々な展示を企画して地域交流を図っている。学内での居場所づくりの推進や体験を伴う読書の推進を経て、2019年には高校生と教員、学校司書が地域のウィキペディアタウンに参加し、編集成果を学内で共有した。新カリキュラムに向けて段階を踏んで学習環境を整備し、高校生たちが実社会について学ぶ機会を創出し、地域探究を支える体制を築いてきたプロセス全体を評価したい。</p>
<p>ライブラリアンシップ賞</p>	
<p>ビジネス支援図書館推進協議会とその実践者</p>	<p><u>日本における公立図書館のビジネス支援サービス推進と実践</u></p> <p>2001年から公立図書館がビジネス支援サービスを行うための調査・研究を行い、関連セミナーを継続して開催している。また、図書館職員等を対象とした講習会を18回にわたり開催、その500名の受講者が、全国の図書館でビジネス支援サービスの構築に努め、同時に様々な図書館サービスに取り組んでいることを評価した。2019年にワシントンで開催されたALA年次大会には公立図書館職員と協議会関係者を派遣し、世界に向けて日本のビジネス支援サービス等の発表を行っている。</p>
<p>埼玉県高校図書館フェスティバル実行委員会</p>	<p><u>書店、作家、出版社を巻き込んだ、学校図書館と外部のコラボレーションイベントの継続的な開催</u></p> <p>2011年から3年間埼玉県高校図書館フェスティバルを開催、その後毎年「埼玉県の高校図書館司書が選んだイチオシ本」という書店、作家、出版社を巻き込んだイベントを開催し、県民に学校司書の必要性和「人」のいる高校図書館の楽しさを感じてもらおう活動に取り組んでいる。選考においては、外部との繋がりが疎かになりがちな学校図書館において、市民が多く参加するイベントでの広報活動を積極的に行っている点、書店や出版社、作家とのコラボレーションを盛んに行い随一の社会性を持っている点、立ち上げ時以外の委員が数多く加わり今後も継続した取り組みとなることが予想される点を評価した。</p>